

京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十一年四月一日発行
通巻一〇一六号 隔月一回 一日発行



4月号

— 近 詠 —

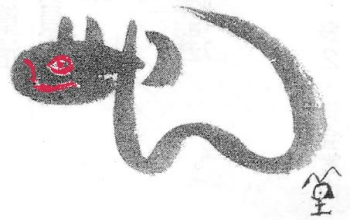
雪溪晴 丸山佳子

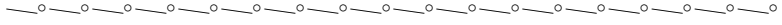
待たせたる除夜の枕をなぜ合掌

初写真ゆかしお庭の箒目で

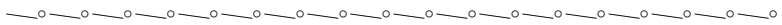
歴とした水引を解く一月十日

寒青空そわかそわかと自己体操





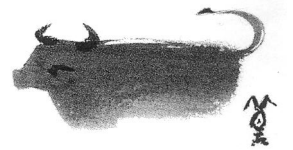
くさめして鳩と共遊するベンチ
鴨万羽賞^ほめもくさしもせず眺む
コーヒーのおかはり比良は雪溪晴れ
旧街道はプロにお任せ春は遠し
佐保姫の香りしてゐる緋の小橋
日本の森どこを抜けても松の芯



豊 田 都 峰

清響集 その九十六

寒の雨きのふの白きままの日記
朝凍や鳥よりはやくき人の跡
露の臺見つけてよりの里びより
浦風に袖吹かれゐる人磨忌
白鳥のひとかがやきに着水す
白鳥の首ひとすぢに湖を越ゆ



春寒に追ひつかる橋越えてより
広すぎてこぼれしやうにある春寒
風の紋野にみてもして西行忌
西行忌わがものの顔の雲と風
信心の歩みたしかに木々芽ぐむ
信心のひとすぢ今に梅かをる
風ゆする梢のあたりの芽吹きごろ
わさび田の水紋にある山の音

秀華採集

不在とす黄落を踏む闇にゐて

木山杏理

今の己の感じている存在感。「黄落を踏む闇」はいい沈潜の刻。誰にも邪魔されたくない。その思いが「不在とす」。倒置法も効果的である。

烏瓜手繰れば村の産屋見ゆ

西村摩耶子

ていねいに地図をまるめて冬眠す

村田富美子

前句、からまりのような向こうに風土風習を見るといふ手法はよい。後句、春への心がけを具体的に描いてよい。特に「産屋」「地図」の措辞に注目した。

近 詠

早 蕨

鈴鹿 仁

きさらぎの眞ん中にゐて私語尖る
春 昼 や 総身とろけて鳩と化す
春 遅 し 白紙に戻す風一途
春 寒 し 暗示にかかる猫もゐて
蕨 長 く 風 の 便 り を 聞 く ま で は
早 蕨 や 十 指 い つ ぽ ん づ つ の 形なり
野 風 呂 忌 や 円 描 く も の に ぶ ん ま は し

神麓集



高山祭 新関 一杜

十二台の山車のからくりよく笑ふ
 春愁や四角のナフキン純白に
 ガラシヤの墓はぽつんと玉椿
 ふり向かず十三詣よく登つた
 ふと妻が眞面目の顔で四月馬鹿

障壁画 林 日圓

探幽齋法眼とはに風光る
 東照宮縁起絵巻や風薫る
 陽明門天井画成り山笑ふ
 二条城障壁画なり春眠す
 狩野派の絵師を抱へし春茜

東京タワー 北村 香朗

師走に祝ふ東京タワー五十年
 賀状書き一と息田丸彌白川路
 テータイム何度もありて賀状書き
 百五十年祝ぐ横浜の光りあふ
 初割りし硝子小鉢の光りあふ

猫 枕 藤岡 紫水

初灯明炎に泛ぶ一の人の
 猫枕かの日詠みたる相聞歌
 初暦掛けてはじまる我が余生
 老の春静かと思ふ常の景色
 我が句碑のほとり艶めく初景色

野風呂岬 和田 照海

初日いま野風呂岬の正面に
 端正な野風呂岬の大初日
 七橋や野風呂岬の初日灘
 初鷗とびしま海道野風呂岬
 御手洗へ架橋は愉快初便

高木 智

厄塚の厄積み上ぐる吟味して
 節分に出遅れがちの人の波
 マスクしてマスクの女とすれ違ふ
 雀らに和して鶯まぎれざる
 猫の恋雀は枝にたむろして

神麓集



一笑のあと

北川 孝子

浮寝鳥赤を好みて人老ゆる
数へ日の人それぞれの歩幅かな
一笑のあとのだんまり師走の座
子に伝ふ言葉ひとすぢ去年今年
汲み置きの水くらくらと年迎ふ

松川 都青

あさつては冴える私に会へるかも
職解かれ蹴る石もなき年の暮
紅くにはなり切れぬまま冬眠す
口重き文学なれど底冷えす
弾まねば何か失ふ年の暮

狐 火

柴田 朱美

狐火を男世帯の火種とし
狐火の焔で煮つめた一行詩
惜しみなく奪はれたしと狐火に
狐火が火を捨てに来る夜泣橋
狐火や魂すこし軽くなる

船越 美喜

初茜窓に比叡の凜然と
吉凶を信ずるとなく初みくじ
こころざしなほ軽からず年迎ふ
おのづから家路せかるる小夜しぐれ
賜りし句集を並べ去年今年

春の風

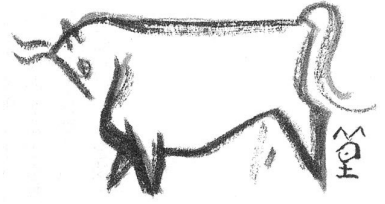
竹貫 示虹

その人のほとりから来る春の風
花満開徒食の爪の伸び易し
みづうみと空を残して雁帰る
春昼の人の気配のなき仏間
散る花や消息欄に序列なく

初 鏡

丹生をだまき

初祈願ただ「静かなる日々を」とのみ
初曆忘れじの日に赤マルを
しやれ心失ふまじく初鏡
来ぬ人を待つ裏白の反りかへり
古代より太陽は神初御空



京鹿子集

豊田都峰選

一日をいちにち使ひ寒卵

東京 木山 杏理

京都 村田富美子

筑波嶺の風に色あり大根引く
不在とす黄落を踏む闇にゐて

能面の裏にひそみし雪蛭

早春を支へあひみる灯台守

烏瓜手繰れば村の産屋見ゆ

風の漕ぐ葉音の乾き冬木道

昨夜の風落葉の嵩として去れり

枯蓮風おと低く泥に秘む

食卓で事足り百の賀状書く

初買ひは起点さがしの時刻表

京都 村田富美子

私といふ他人と出会ふ枯るる中

月冴ゆるしろより白きマリア像

ていねいに地図をまるめて冬眠す

院のつく町に住み古り底冷えず

銀杏黄葉会釈を交はず朝散歩

厚敷きの落葉蹴り翔つ大鴉

鉢植糸も整理整頓冬構へ

古机共に歩めり賀状書く

故郷は京の下町松飾り

亀岡 西村摩耶子

さいたま 神田 惣介